



東南海地震・三河地震の体験談

前号に引き続き、戦時下社会を襲った2つの大地震、東南海地震及び三河地震の体験談につきまして、両地震の被害を受けた愛知県西尾市で被災された方々の体験談の紹介です（情報提供：愛知県西尾市）。

体験談その1 Aさん（西尾市徳次町）

東南海地震と三河の大地震は、私の頭から一生去ることのないおそろしい思い出でございます。

昭和19年12月7日は、よく晴れた良い天気でした。私は毎日麦蒔をしておりましたので、その日も父と2人で田に出かけました。午後2時頃か3時頃か分かりませんが、鍬を手に仕事をしていますと目まいがしてきたような感じで、立ってられず、座ってしまいました。父を見ますと同じこと「地震だ！！」と言われました。

あちこち大きな「ギイーグシャー」と音がしたかと思うと、土煙が空高く舞い上がっています。早速帰りましたら、村に倒壊した家が2軒ございました。外で立ってられない程強い地震は始めてでした。

村中で、倒壊なさった家へ出て、1日で取り片付けました。「昼で良かった。夜だったら命が無いよ。」と口々に言っておられました。

その後、余震は時々起こりました。私の主人は留守でしたので、昼は隣家の婚家へ仕事に行き、夜は実家へ帰っていました。実家の私の部屋は2階にありましたので、余震の起きる度に母は心配して、下の部屋に代るよう言っておられました。「もし地震が起きたら窓から屋根へ出るから。」と笑っていました。内心、大きな木材で作ってあるあの倒壊した家を思い出して心配でした。

36日後、昭和20年1月13日は未明、恐るべき日が来ました。その夜、歯が痛く、明けるのを待って薬をのもうと思っていると、突然、ギシギシと始まりました。出ようかと考える間もなく大きな音と真の暗闇。足元のタンスが転び、足はぬけられない。手を上へ出すと天井です。

「転んだのかしら」ギシギシギシ地震は止まりません。足はしめつけられるようでした。

「操、生きてるかあー」兄の声が遠くの方でかすかに聞こえる。「南の間にいるよう」と力一杯言っても聞こえないらしい。「声がしないで死んだかな。」と私には聞こえます。この家が転んだだけではないなと思いました。

外は何となく揺々しい。下敷きになっている私には外の声しか聞こえません。頼りになるのは外の方のみです。そのうちに「小林さん、家中下敷きになって私だけ出れたが、何とか手がおかりしたい。」と隣家へ来られた声がします。「家の操が下敷きになっているから早く出そうと道具を探しているのだが、家の操を助けたらすぐ行きます。」すぐ近くに聞こえる義父母の声。あゝ今来ていただけると思うと嬉し涙が止まりませんでした。

私が出していただいた時は、東の空が白々としかけていました。

私のいる所は隣家の方へ倒れ、上下に震ったと聞いていますが、放り出されたという感じで、母屋はあちら、横家はこちらといったように、土台さらぶつけたように転んでいました。

井戸から水が吹き出して、表は川のように流れていました。前の田も四とこ位水が吹き出していました。どうなるのか不安で一杯です。念仏口にせずにはいられませんでした。

兄が力の抜けた声で「母は亡くなったよ。」と言われた時、私は昨日まで元気に仕事をしていた母を思い浮かべ、今朝は冷たい母と変わっているとは、何というむごい天災だろう。涙の止めようのない思いでした。

婚家の母は助産婦をしておられました。看護婦の資格を持っておられたので、負傷なさっておられる方が有るといけないから廻って来ると、救急箱をさげて出かけられました。「近所の子供さんが頭に大きな傷をなさって、手当をしてあげて来た。行って良かった。仲々お医者様に見ていただけないそうで。」と帰って来られました。今でもあの時のお礼を言っておられます。

当時は、戦争と地震とで心のショックは大きかった。その日、入る家も有りません。先ずその日から、住む小屋を作るのに一生懸命です。むろん資材はございません。縄をしばりつけ、はざなどを使ってワラ小屋を作り、ワラを下に敷き、入るといってもくぐるといったような小屋を作り、亡くなった母に入ってもらい、線香も無いお通夜をしました。

村の戸数は47戸で、お亡くなりになった方が26名でした。本当に痛々しい有様でした。今でもあの日の、あちこ



三河地震で倒壊した家屋（愛知県西尾市）

ちで「生きているかー」「頑張れよー」と真白い霜の朝、響き渡っていた時が思い浮かべられます。

建っている家は、母屋3軒位、横家2軒位で、あとは全部倒壊しました。私達の村が特にひどかったことを物語っています。今のように機械が有ったら、早く救助もできたでしょうが、道具一つ有りませず、大勢の死者が出たと思われます。

よく学校で「地震がしたら机の下へ入りなさい。」と先者に聞かされましたが、私もタンスのすき間があって助かったと思います。

「天災は忘れた頃にやって来る」と昔の方が言われましたが、2度とないことを祈ります。

毎年1月13日、震災で亡くなった方の追弔会をお寺で営み、26名の冥福を祈って、今の幸せを感謝しています。

電気もなく風呂もない生活を3ヵ月も暮らしました。空襲時にて、お亡くなりの方を火葬場にお送りして拝みました時、地震の恐怖が頭から去りませんでした。

電気もなく風呂もなく、不自由な生活を3月もして、初めて工作隊の方に作っていただいた5坪の家に入りました時、戦地を思えばこの位いと、皆な同じでしょう。一年中倒壊した家の片付けをしていました。今は当時の面かげはなく、地震に少しでも強いようにと復旧して来ました。

体験談その2 Bさん（碧南郡大浜町（現碧南市））

昭和19年12月7日、当時私は、碧海郡大浜小学校（現碧南市）六年生の腕白盛りでありました。放課後に一銭玉の賭事が流行していて、1クラス約50名程の8割の生徒が、これを先生に暴露してしまい、教壇に座らされて2メートル余りの竹竿で、罰として一人ずつ頭にお目玉を喰い、叩かれた者から順に泣いていきました。

あと3、4人で私の頭へ番が来る…その時、あの忘れもしない恐ろしい東南海地震が、教室を揺れ動かししました。私達は、地震の経験はなかったです。何事かと思えど、皆教室を逃げ迷う。廊下を走ろうにも足がいうことを効かない。身体が窓辺に、また壁板にと叩きつけるほどヨタヨタと、それでも必死に外へ逃げようとしてました。

校舎と校舎との間の中庭に、直径1メートル程のカメが埋められてあり、その中の水が、揺れる震動で、チョボンチョボンと地上1メートル余りも高く噴き上がっていたのが、今でも私の目に焼きついています。

やっとの思いで、広い校庭運動場へ出た。運動場の砂地の面、がいたるところで地割れして、その亀裂した目から、あちらこちら地下水が噴き出しています。先生より、初めてこれが地震であることを知らされました。

学校の近くの者の家族は、我が子を案じて飛んで来られるが、私は大浜港駅（現碧南駅）近くで、家も遠く、誰も来られませんでした。

先生の指示で、近所の友人と急ぎ帰宅します。途中、家は…親達は…と案じながら。

学校と私の家のほぼ中間に、高与橋という橋があり、今までこの橋からは、大浜港駅など密集した住宅で見えることもなかったが、この日は、5、600メートル先のこの駅が見えている。

駅より南へ向かい東側の住宅は、ほとんど家が倒壊してしまったのです。この列の中に私の家もあったのだが…。

私の家は、30坪ほどの中2階建の家であったが、これが蛙を叩きのばしたごとく屋根が地面に叩きつけられていました。水道管が破裂して、地面より水が噴き上がってます。

留守居していた母は、地面を追う思いで駅の広場へ避難したとのことでした。父も姉弟も皆無事で家に帰って来ました。親子6人、お互いに無事を喜び、抱き合って倒壊した家の前で泣きました。今夜から家族6人、寝る所もない。父親は、必死で寝ぐらを探し廻り、ようやく中区内の西方寺という寺の社務所を借り、昭和20年の元旦をここで迎えました。

こうして1月13日、またも三河地震という大震災に出くわした。私の記憶では、午前4時前後だったと思います。

冬真盛りの午前4時といえば、まだ屋外は真暗やみ…。手探りする思いで、親子呼び合いながらお寺の庭へ這い出ました。今でもこの耳に焼きついているあの無気味な音。倒壊する家の電線の切れる青白い光。あちらにも、こちらにも、稲妻のごとく光り狂う。

私達の住んでいたこの社務所も、隣の大きな土蔵倉が倒壊してきて寄りかかり、壁をぶち破って来ていました。避難していなかったら、私達の寝床の上に押しかぶさっていたと思うと、今でもゾーとします。

この三河地震では、余震が何十回、いや何百回と数分おきに押し寄せて来ました。家



東南海地震の被害の様子（三重県尾鷲市）

に入ることもできず、取り敢えず大きな松の根元に4枚の唐紙を横に寝させ、4つに組み、その上に屋根代りの障子を乗せ、この中を住居にしました。時折り襲い来る余震に震えながら。そのたびにあの大きな西方寺の本堂が目の前でギチギチと無気味な音をたてながら、右に左に揺れ動くのがはっきりと目に映ります。

この地震で、私のクラスの友人は、中部電力大浜火力発電所の煙突がくずれ落ち、その破片が空から降って来て、避難の途中直撃を喰って即死し、他にも多くの人々が逃げ遅れて倒壊した家の下敷きとなり、この世を去っていきました。

こうして数日間を行くあてもなく、出入りにも四つん這いで入らねばならない唐紙の家の生活をせざるを得ませんでした。風の日も雪の日も家族が互いに身を身で暖め合いながら、……。煉炭の火一つが恋しいでした。その唯一の煉炭の火が、苦しいながらも私達をほのぼのとさせてくれたが、戦時非常体制下、時折りけたたましいサイレンの空襲警報の知らせで、天井の障子に映える煉炭の火の明りが、敵機に発見されると警防団の人々に叱られて、あわててその火を消したこともありました。

こうして、しばらくして、救援の工作隊の人達が東南海地震で倒壊した私の家のあとに、7坪ほどの仮住いを建ててくれ、数ヶ月の悪夢を思い出に、あの終戦を迎えたのでした。

体験談その3 Cさん（西尾市中畑町）

地震を体験して本当の恐しさを知りました。予告なく来る地震。あの30年前の昭和19年12月7日、昼食を終えて一休みして、仕事にかかると間もなく、ガタガタと軽い地震を感じました。大した地震ではなくホットしたそのとたん、また大きくゆれて来ました。とっさに戸外へ飛び出しました。あたりを見回しましたが、別段異状もなく、飛び出すまでもなかったかなと思って、皆と顔を見合わせたとたん、今度は非常に大きく、天地がヒックリかえるかと思われる程の大ゆれです。もう立つことも歩くことも出来ません。四ツンバイです。板囲は波のようにのたうっています。空気の震動も激しく、木々木の梢も非常にざわめき、嵐を思わせる騒然さです。隣の空家が脹らんだり萎んだり、言葉では言い表わせないような形になって揺れています。

この揺れは数分続いたと思います。でも横ゆれでしたから潰れそうな家でも倒れず、全般にみて、個々の被害は案外少なかったようですが、範囲が広がったせいか、電気が以外に長くつきませんでした。

あの当時は燈火管制下で、暗いのに案外気にかかりませんでした。工場の仕事はもちろん出来ませんが、一番生活に困ったのは、精米所の機械が動かなくてお米がつけなかったことです。この時です、玄米を1升ビンに入れて棒でつついて飯米にして飢をしのいだのは。また、あの当時はどこの家庭でも井戸より呑み水を汲んでいたから困らなかったが、今のように、地下水の濁水により、皆水道より水を得ている時、水道管の破裂断水など、水がなかったらそれこそ大変です。水の出る井戸は大切にとおもいますが、これも常時使っていないくは役に立たず、思案なげ首です。

また、その翌年、三河の大地震。忘れもしない1月13日未明午前3時を幾らか過ぎた

頃、熟睡の最中、突然爆弾が破裂したかのようなものすごい衝撃。余りの激しさに、どうしても地震だと思えませんでした。空襲時のため、衣服はまとめて枕元へおいてあったから、夢中で衣服を持って立ち上がった瞬間、ひっくり返って前の地震と同様に、立つことも歩くことも出来ません。咄嗟に机の下へもぐりこみました。電



東南海地震で生じた地割れ (三重県桑名市)

気は消えて真暗です。でも、家が倒れなかったからよかったものの、これが倒れていたら、足の弱い机なぞ一タマリもなく潰れていたでしょう。

地震が一応おさまってから、外へ出ました。夜空には、星が何もなかったように、冷たく光っていました。南の果ての方では、間断なく稲妻が光っています。ドンと地響がしては、ガタガタと余震が来ます。お隣のガラス戸が倒れたのか、ガラスのわれる音がします。寒さと恐しさに体中が、ガクガクふるえてきます。夜中だったせいか、火事は近くには一軒もありませんでした。不幸中の幸いでしたでしょう。

夜もかすかに明けて来た頃、お寺が倒れ、疎開児童が下敷になっているから、救出作業に出てくれとの、町内からのふれで、家の主人が出掛けてゆきました。また、近くで大きな農家が2軒程倒れ、家族の方が下敷になられましたが、近所の方々の努力により救出されましたが、お年寄と子供さんが、それぞれ犠牲になられました。この家は両方共がガケの中腹と上に建てられていました。ガケ地は、地震には危いとつくづく思いました。

地震は、いつかは起きることでしょうが、常に物事を冷静に判断して、被害を最小限に食い止めねばならぬと思います。